

聖徳太子の黒駒説話について

— 中国説話の受容とその構想 —

趙 倩 倩

はじめに

聖徳太子は、厩戸皇子⁽¹⁾ともいい、日本の飛鳥時代に生きた歴史的な人物である。蘇我氏などの豪族が実権を握った時代に、推古天皇の摂政として、冠位十二階・憲法十七条を制定し、皇室中心の中央集権を強化した。文化の面でも、遣隋使を派遣して、先進的文化を導入し、仏教の興隆にも努めた人物である。日本において、長きに亘り、理想的な人物・英雄的な人物として評価され、また信仰対象ともなってきた。しかし、数々の業績を残した太子が皇太子のまままで早世し、その一族も蘇我氏に滅ぼされ、悲劇的な英雄という一面も残している。その死後、太子に対する敬慕の気持ちと同情の気持ちを抱いた人々によって、さわめて多くの太子伝記が記され、さまざまな伝承が残された。

本稿では、太子が黒駒に乗って飛翔する説話について考えてみたい。この説話は、延喜一七年(九一七)以前に成立したとされる『上

宮聖徳太子伝補闕記』⁽²⁾(以下『補闕記』と略称する)にはじめて見られる。延喜一七年の撰である『聖徳太子伝暦』(以下『伝暦』と略称する)には、『補闕記』に載る説話と類似する説話が見えるが、太子が馬を全国に求めたり、良馬を見抜くプロットが加筆されている。

この黒駒説話が必ずしも事実であるとは考えがたいが、後代の太子信仰に大いに影響を与えたことは疑いない。特に中世になると、この黒駒説話に拠った絵像が各地に広がり、太子信仰の普及にも大きな役割を果たした。

この黒駒説話の由来に関しては、中村宗彦氏が、周の穆王の八駿の故事から影響を受けたという説を唱えている⁽³⁾。しかし、中国の文献を調べると、駿馬に乗る天子は周の穆王だけではなく、漢の武帝や唐の太宗など多くの天子と駿馬との故事が数え上げられる。天子と駿馬と一緒に登場するのはなぜだろうか。太子の黒駒説話は、また聖徳太子にどのような性格を与えようとしているのだろうか。

本稿は、『補闕記』と『伝暦』に見える黒駒伝承を中心に、中国古

典における天子と駿馬の説話や駿馬の意味を意識しつつ、その黒駒説話が聖徳太子信仰に与えた影響について考察を試みるものである。

一、『補闕記』における黒駒説話

『補闕記』は『伝暦』の下巻末に書名がみえるところから、『伝暦』が成書した延喜十七（九一七）年以前に、成立したものと考えられる。多くの太子伝の中で、成立年代の比較的古いものとして注目されている。『補闕記』の冒頭に「日本書紀、暦録、并四天王寺聖徳王伝、具見行事奇異之状、未尽委曲、憤々不鈔。因斯略訪耆旧、兼探古記、儻得調子膳臣等二家記、雖大抵同古書、而説有奇異、不可捨之、故録之云爾。（日本書紀、暦録、並びに四天王寺聖徳王伝、具に行事奇異の状を見るも、未だ委曲を尽さずして、憤々たること鈔ならず。斯れに因りて略く耆旧を訪ね、兼ねて古記を探るに、儻たま調子・膳臣等の二家記を得たり。大抵古書に同じきと雖も、而かるに説に奇異有り、之を捨く可からず。故に之を録して爾か云ふ。）」⁽⁴⁾とあるように、『日本書紀』などに記された太子の事柄は少ないために、調使家記や膳臣家記より太子に関するものを取材し補ったものと思われる。

その黒駒伝説に関わる部分を『補闕記』より引用する。

庚午年四月卅日、夜半有災斑鳩宮。太子謂夫人膳大郎女曰。汝如我意、触事不違。吾得汝者、我之幸大。（中略）如太子馬。其毛烏斑。太子馭之、凌空躡雲、能飭四足。東登補時岳、三日而還。

北遊高志之州、二日而還。太子欲臨看之地、此馬奉駕、三四五六

日還。莫処不詣。太子每命曰、吾得意馬、甚善甚善。儻有錯躡、終日不喫、似有悔過。太子宣喫、敢乃喫草飲水。辛巳年十二月廿二日斃。太子愴之、造墓葬墓。今中宮寺南、長大墓是也。（庚午年四月卅日に、夜半、斑鳩宮に災する有り。太子、夫人の膳大郎女に謂ひて曰く、「汝、我が意の如くして、事に触れて違かず。吾、汝を得たるは、我が幸い大なり」と。（中略）太子の馬の如し。其の毛烏くして斑あり。太子之を馭するに、空を凌ぎ雲を躡み、能く四足を飭る。東かた補時岳に登り、三日にして還る。北かた高志の州に遊び、二日にして還る。太子臨み看んと欲する地は、此の馬に駕し奉り、三四五六日にして還る。処として詣らざる莫し。太子毎に命じて曰く、「吾、意なる馬を得たり。甚だ善し、甚だ善し」と。儻し錯ち躡るること有らば、終日喫はず、過ちを悔ゆること有るに似たり。太子、喫ふを宣ふに、敢へて乃ち草を喫ひ水を飲む。辛巳年十二月廿二日に斃ぬ。太子之を愴しみ、墓を造り墓に葬らしむ。今の中宮寺の南、長く大なる墓、是れなり。）」⁽⁷⁾

『補闕記』に記された内容から、黒駒が快足な駿馬であったのみならず、太子に忠実であったことが窺える。もちろん、太子からも厚く寵愛された。黒駒が死んだ後、太子がその死を悲しみ、わざわざ黒駒のために、墓を作らせて葬った。まさに名君と忠臣のような間柄であった。

二、『伝暦』における黒駒伝承

次に『伝暦』に載る黒駒説話をみてみよう。

『伝暦』は『聖徳太子平氏伝』とも呼ばれ、太子の事績を編年体で記した伝記である。望月信成氏によると、「蓋し本書は太子御伝中最も整備せるものであつて、後世太子伝を記伝するものは概ね本書を根本資料としないものはない」という⁽⁸⁾。藤原兼輔が延喜十七年(九一七)に撰したともいわれている⁽⁹⁾。奇異な伝承が多く盛り込まれており、後世の太子に関する絵画、彫刻などは、ほとんどこの本に記された話に拠つたものである。黒駒に関わる箇所を『伝暦』推古天皇六年の条より引用する。

〔推古天皇六年〕、夏四月、太子命左右、求良馬。府諸国令貢、甲斐国貢一驪駒四脚白者、数百匹中、太子指此馬曰、是神馬也。餘皆被還。令舍人調子磨加之飼養。秋九月、試馭此馬、浮雲東去。侍從仰觀、磨独在御馬之右、直入雲中、衆人相驚、三日之後、廻轡歸來。謂左右曰、吾騎此馬、躡雲凌霧、直到富士獄上。転到信濃。飛如雷電、經三越、竟今得歸來、磨、汝忘疲隨吾、寔忠士也。磨啓曰、意不履空、両脚猶歩、如踏陸地。唯看諸山、在脚之下。(推古天皇六年)、夏四月に、太子、左右に命じて、良き馬を求めしむ。諸国に府せて貢らしむ。甲斐の国、一の驪駒の四脚の白き者を貢る。数百匹の中、太子、此の馬を指して曰く、「是れ神馬なり」と。餘は皆還さる。舍人の調子磨をして之に飼養を

聖徳太子の黒駒説話について(趙)

加へしむ。秋九月に、試みに此の馬に馭して、雲に浮かべて東に去る。侍從仰ぎ觀るに、磨独り御馬の右に在り、直ちに雲の中に入る。衆人相ひ驚く。三日の後、轡を廻して歸り來る。左右に謂ひて曰く、「吾、此の馬に騎り、雲を躡み霧を凌ぎて、直ちに富士獄の上に到る。転じて信濃に到る。飛ぶこと雷電の如し。三越を經て、竟ひに今歸り來るを得。磨、汝、疲れを忘れて吾に隨ふ。寔に忠士なり」と。磨啓して曰く、「意ふに空を履まねど、両脚、猶ほ歩むこと、陸地を踏むが如し。唯、諸山を看るに、脚の下に在り」と。

続いては推古天皇十八年の条、二十九年の条、皇極天皇三年の条にもそれぞれ黒駒に関わる内容が散見されるために、それらの部分をも抜粋して掲げる。

〔十八年庚午〕秋九月、太子駕驪駒、參小墾田宮、錯而躡之。太子尠驚、還斑鳩宮。驪駒不能喫草、亦不飲水。両耳掩低、合其両目、似有恨過。太子聞之、遣使宣、喫草飲水。乃開其目、含水草。以之為常。(十八年庚午)秋九月に、太子、驪駒に駕して、小墾田の宮に參るに、錯ちて之を躡る。太子尠しく驚きて、斑鳩宮に還る。驪駒、草を喫ふこと能はず、亦た水をも飲まず。両耳掩ひ低れて、其の両目を合して、過ちを恨やむが似し。太子之を聞きて、使を遣して宣はく、「草を喫ひ水を飲め」と。乃ち其の目を開けて、水草を含む。之を以つて常と為す。

〔二十九年辛巳春二月〕、(略)太子薨日、驪駒悲鳴、不喫水草。

被太子鞍、随輿到墓。閉埴之後、見墓大鳴、一躍而斃。群臣大異、將還其尸、埋中宮寺南墓。一説、辛巳年十二月廿二日斃。太子愴之、造墓而葬。墓今在中宮寺南。長大墓是也。（二十九年辛巳春の二月に）、（略）太子薨する日に、驪駒悲鳴して、水草を喫はず。太子の鞍を被ぎて、輿に随ひて墓に到る。埴を閉じての後、墓を見て大ひに鳴き、一たび躍りて斃す。群臣大ひに異とし、其の尸を將ち還り、中宮寺の南の墓に埋む。一説に、辛巳の年の十二月廿二日に斃す。太子之を愴しみ、墓を造りて葬る。墓は今、中宮寺の南に在り。長く大なる墓、是れなり。）

皇極天皇三年、（略）又曰、太子生平之日、常嘆曰、吾得合意妻与馬、但馬子未得。（皇極天皇の三年に、（略）又曰く、太子の生平の日、常に嘆じて曰く、「吾、意に合ふ妻と馬を得たり。但し馬子、未だ得ず」と。）⁽¹⁰⁾

要点を記すと、推古天皇六年の夏四月に、太子が全国に良い馬を求め、命じた。甲斐の国から、四足だけが白い驪駒が献じされた。太子がこの馬が「神馬」であることを見抜き、調子磨を飼養人に命じた。その年に、太子が調子磨をつれて、驪駒に乗り空を飛んで、富士山・信濃・三越を巡行した。推古天皇十八年の条には、嘗て驪駒が太子を載せて小墾田の宮に出かけた途中で、太子を驚かせたことがあったために、自分の過ちを悔やんで飲食しなかった。太子の許しの令を貰ってからはじめて食べるようになった。二十九年の条には、太子が亡くなった日に、驪駒がまた飲食を断じて、太子が生前に使った鞍を

載せて太子の墓の前に殉死した。群臣がこの驪駒を中宮寺の南の墓に埋葬した。注には、一説を挙げて、驪駒が太子より先に死に、太子が驪駒の死を悲しんで、驪駒を中宮寺の南の墓に埋葬させたという。皇極天皇三年の条には、太子が嘗て、妻の膳大郎女と驪駒とを自分の意に適った存在であることを嘆いたことが書かれている。

『補闕記』は簡略に黒駒の記事を記したのに対して、『伝暦』はこの黒駒に関する内容を何か所に分けて潤色を施したのである。

三、黒駒伝説の意味

ここでは、両書に記された黒駒説話を比較し、その骨子の一致する内容を表にまとめてみた。

補 闕 記	伝 暦
①太子が黒駒に乗って、雲を踏みつけて空を飛んだ。 ②東に富士山を登り、北に高志州を行ってきた。太子の行きたい場所であれば、すべて数日程度で往復できる。 ③黒駒が太子に逆らうことがあると、ずっと飲食せず、懺悔しているようであった。太子の許しを貰ってからはじめて食べるようになる。	①太子が調子磨を連れて、この驪駒をあやつり、雲に浮かべて東に去った。 ②富士山の頂上に至り、信濃・三越を経て三日後に帰ってきた。 ③太子を驚かせたことがあったために、黒駒が自分の過ちを悔やんで飲食を断じた。太子の許しを貰ってからはじめて食べるようになる。

ところで、『補闕記』ではなく、『伝暦』に備わるプロットが以下のようである。

I、太子が左右に命じて良馬を求めた。甲斐の国から一匹の四脚の白い黒駒がささげられた。(①の前)

II、地方から献じられた数百匹の馬の中で、太子がその一匹の黒駒だけを指して、「これは駿馬だ」といった。そのほかの馬を全部返させた。(①の前)

III、舎人の調子磨にこの驪駒を飼わせた。(①の前)

IV、太子が巡行した後、調子磨が忠士であると褒め称えた。(③の後)

『補闕記』と『伝暦』における黒駒伝説を比較すると、その相似するところは主に「黒駒」・「馬が空を飛ぶ」・「太子の巡行」という三つの要素に集中している。次には、この両書的一致している要素の一つである「馬が空を飛ぶ」に基づき、この黒駒の意味について考えていきたい。

1、空を飛ぶ馬

黒駒という表記が、今日では一般化しているが、この黒駒説話の原典に戻ると、『補闕記』と『伝暦』はそれぞれ「其毛烏斑」と「驪駒」と別の表記になっている。「烏」はいうまでなく黒色であり、「驪」は『説文解字』に「馬深黒色(馬の深く黒き色なり)」とある。中村氏に既に指摘されたように、周の穆王の八駿の「盗驪」に当たる存在である(11)と理解できる。『補闕記』における太子の「驪駒」と穆王の馬とは、ただ「驪」という文字が同じで、色がみな黒色であるだけであるが、『伝暦』には加えて「四脚白」という属性も記されている。そ

のような四足が白い馬は「踏雪馬」と呼称される。『爾雅』「積畜」には、「四蹄皆白、首。(四の蹄、皆白きもの、首なり。)」とあり、晋の郭璞の注釈によると、このような四足が皆白い馬は、「俗呼為踏雪馬、蹄也。(俗、呼びて雪を踏む馬と為す。蹄は蹄なり。)」という。この特色において太子の黒駒とより相似するのは唐の太宗がかつて乗った「白蹄烏」である。

『全唐文』(12)卷十の「六馬図贊」によると、

白蹄烏、純黒色、四蹄俱白、平薛仁杲時所乘。賛曰、倚天長劍、追風駿足。聳轡平隴、回鞍定蜀。(白蹄烏、純黒色にして、四蹄俱に白く、薛仁杲を平らぐる時に乗る所なり。賛じて曰く、「天に倚る長劍、風を追ふ駿足。轡を聳えて隴を平らぎ、鞍を回らし蜀を定む」と。)

という。唐の高祖が六一八年に唐朝を建国し、のちに二代目の皇帝となる太宗李世民が秦王に封じられ、割拠する敵対勢力の平定に活躍した。文中の薛仁杲が当時甘肅省周辺に割拠した勢力であった。李世民がこの四足だけが白い黒駒「白蹄烏」に乗って、薛仁杲を敗り、更に、隴(現在の陝西省西部周辺)や蜀(現在の四川省西部周辺)の地域も平定したという。このように「白蹄烏」は、太宗の平定活動において、赫赫たる戦功を立てた。『補闕記』と『伝暦』の表現もとても興味深い。『補闕記』の「能く四足を飭る」という表現が、『伝暦』になると、「一の驪駒の四脚の白き者」という表現になる。

更に、この黒駒の飛翔様態について、『補闕記』においては、「空を

凌ぎ雲を躡み、能く四足を飭ふ」と記されているが、『伝暦』においては、「雲に浮かべて東に去る」と「雲を躡み霧を凌ぐ」という表現になる。表現に少々の差異が見えるものの、二話に登場する黒駒がいずれも雲を踏んで空を飛べるという点が相共通する。ここで想起されるのは漢の武帝が作った二首の「天馬」⁽¹³⁾を詠じた歌である。まずその一首目を『漢書』卷二十二、「礼楽志第二」より引用する。

太一況、天馬下。

太一の況、天馬下る。

霑赤汗、沫流赭。

赤き汗に霑ひ、沫流れて赭し。

志俶儻、精権奇。

志俶儻たり、権奇に精る。

籥浮雲、唵上馳。

浮雲を籥み、唵かに上がりて馳す。

体容與、泄萬里。

体容與として萬里を泄る。

今安匹、龍為友。

今安くんぞ匹はん、龍を友と為す。

元狩三年、馬生渥洼水中作。

（元狩三年に、馬、渥洼の水中に生じ、作る。）⁽¹⁴⁾⁽¹⁵⁾⁽¹⁶⁾

更に二首目は、武帝太初四年に、將軍広利が大宛の国から駿馬を獲得した際に、武帝が喜びのあまりに詠んだ詩歌である。

天馬來、從西極、天馬來り、西極從し、

涉流沙、九夷服。流沙を涉り、九夷服す。

天馬來、出泉水、天馬來り、泉水より出で、

虎脊兩、化若鬼。虎の脊のごとく兩あり、化すこと鬼の若し。

天馬來、歷無草、天馬來り、草無きを歴、

經千里、循東道。千里を経て、東の道に循ふ。

天馬來、執徐時、天馬來り、執徐の時に、

將搖拳、誰与期。將に搖拳らんとし、誰と期せん。

天馬來、開遠門、天馬來り、遠門開き、

疎予身、逝崑崙。予が身を疎んじ、崑崙に逝く。

天馬來、龍之媒、天馬來り、龍の媒なり、

遊閼闔、觀玉台。閼闔に遊び、玉台を觀ん。

太初四年誅宛王獲宛馬作。「天馬」十

（太初四年に、宛王を誅し宛馬を獲て、作る。「天馬」十）⁽¹⁷⁾

一首目の中に「浮雲を籥む」という表現が見える。「籥」は「躡」に通じる。調べた限りでは、これは馬が浮雲を踏むという表現のはじまりと思われる。この天からの賜物にほかならぬ馬は赤い汗を流し、万里でもゆったりと馳せることができ、まさに空を飛ぶ龍の友である。「赤き汗に霑ひ、沫流れて赭し」の一句は名高い汗血馬をいうことばである。いわゆる汗血馬は『史記』『大宛伝』『漢書』『西域伝』に「天馬子」（天馬の子）と記される。大宛国に産する駿馬である。

一首目は馬の走る時の迅速を讃え、武帝の喜びの気持ちを表し、二首は駿馬の国にとつての重要性を強調し、馬が来ることは「九夷服す」象徴であると明白に言っている。以上の二首の馬を詠む詩歌から、「天馬」を得ることが中国古代において、皇帝、ひいては、国にとつて、非常に重大な意義を持っていることが分かる。しかも、漢代という時代の、馬の品種改良がそれほど進んでいなかった状況の中では、「天馬」と呼ばれる駿馬がまさに皇帝の求めたものであつたらう。

聖徳太子の黒駒は、漢の武帝の「天馬」のような存在であり、皇帝のような天下の至尊でなければ、手に入れることのできない宝物であったに相違ない。

中国古文獻を更に調べると、周の穆王と八駿、唐の太宗と六駿馬以外にも、漢の文帝と九逸・隋の文帝と獅子驄・唐の玄宗と龍馬・唐の代宗と九花虬・唐の徳宗と神智驄など、天子と駿馬にまつわる伝承が複数存在する。馬が貴重な時代のこと、駿馬を所有することのできた人も限られていて、とりわけ八駿や九逸のような快足の良馬は、皇帝にしか持てない貴重な存在であった。駿馬を有することはその時代においては天子に相当する身分の象徴であったと思われる。

2、馬に乗って巡行する

続いて、「太子の巡行」という要素について考える。従来の研究では、この「空を凌ぎ雲を躡む」という表現だけに注目し、この説話を周の穆王の八駿と比べ、これは神仙思想の反映であると論じられてきた。⁽¹⁸⁾確かに、馬に乗って、雲を踏むという行為はとも人間ができる行動とは思えず、神仙の所為であると考えられない。しかし、それはあくまで太子の馬の迅速を表現する方法であり、その「巡行」という行為こそ重要な意味を持っている。

このような駿馬に乗って巡行する故事は中国の古書にも見える。『太平広記』巻第四百三十五、「畜獸二」に『王子年拾遺記』より引用する「周穆王八駿」と題する記載が見える。

周穆王即位三十二年。巡行天下。馭八龍之馬。一名絶地、足不踐

土。二名翻羽、行越飛禽。三名奔霄、夜行萬里。四名越影、逐日而行。五名踰輝、毛色炳耀。六名超光、一形十影。七名騰霧、乘雲而趨。八名挾翼、身有肉翅。遞而駕焉、按轡徐行、以巡天下之域。穆王神智遠謀、使轍迹徧於四海。故絶地之物、不期而自服。

(周の穆王即位して三十二年、天下を巡行す。八龍の馬を馭す。一は絶地と名づけ、足は土を踐まず。二は翻羽と名づけ、行くこと飛禽を越ゆ。三は奔霄と名づけ、夜行すること萬里。四は越影と名づけ、日を逐ひて行く。五は踰輝と名づけ、毛色は炳耀たり。六は超光と名づけ、一の形に十の影あり。七は騰霧と名づけ、雲に乗りて趨る。八は挾翼と名づけ、身に肉翅有り。遞りて駕し、轡を按じて徐ろに行き、以て天下の域を巡る。穆王神智遠謀ありて、轍迹をして四海に徧からしむ。故に絶異の物、期せずして自ら服す。)

文中の傍線部を読むと、天下を巡行するのはただの巡遊ではなく、絶地の人々を服従させる効果もあつた行為である。穆王が深謀遠慮であり、車の跡を四方に巡らせると、辺地の人々も自ら従つてきた。このような発想が前掲の武帝が作った「天馬」の歌の二首目にも出てきた。「天馬来り、西極従し、流沙を涉り、九夷服す」という句に現れる。つまり、「天馬」が西方より来れば、「九夷」の異民族が服従する。まさしく四方が服従することになるのは、この馬の力によると思われる。

下出積与氏が「神仙思想―日本武尊と聖徳太子説話を中心とし

て―」の中で、太子の黒駒説話が「全くシナの神仙類似のもので、この場合の神馬はあたかも彼の地における鶴や龍にも似た役割を演じている」と述べた。しかし、馬という動物は鶴と龍と比べると、古代の社会においては、異なる役を演じていた。『後漢書』「馬援伝」に「馬者、兵甲之本、国之大用（馬は、兵甲の本にして、国の大用なり）」といっているように、馬は古代の戦において、非常に重要な存在であった。故に、ここに出てくる馬も神仙の乗り物として簡単に片づけられるわけにはいかない。馬は戦力の象徴であり、国力の象徴でもある。

聖徳太子が駿馬に乗って巡遊する意味を考える時に、その発想の源流である周の穆王と八駿の話及びその類似する話を理解した上で考えなければならぬ。太子が『補闕記』において、黒駒に乗って「高志之州」を巡行した行為や、『伝暦』において、黒駒に乗って「信濃」や「三越」を巡行した行為も穆王の八駿に乗って四方を服従させる行為を連想させる。

聖徳太子はかずかずの業績をのこし、皇太子のままで早世した。しかも、その一族は蘇我氏のために滅ぼされるなど悲劇的な結末を迎えた。太子が各地に巡行した要素は、太子を思慕する人々は太子の死後、その伝記を綴る際に、敬慕の気持ちや同情の気持ちを昇華して、太子を理想的な人物としてだけでなく、あるべき治世者として描き出すようにする意図によって取り入れられたと思われる。

3、良馬を求める・良馬を見抜く

最後に、『補闕記』にはなく、『伝暦』のみにある「全国に良馬を求

める」ことや、「太子が良馬を見抜く」こと、「調子磨を黒駒の飼養人に任命した」ことを問題としたい。

前にも触れたように、馬という動物は古代において、とても重要な存在であり、軍事力や国力を左右する存在でもあった。そのために、国の統治者も駿馬を好んで求めていた。中国の皇帝の中の典型的な例は前に触れた漢の武帝である。『史記』「大宛伝」、『漢書』「西域伝」によると、西域から帰ってきた張騫から、武帝は汗血馬のことを聞いた。武帝はこの汗血馬を求めるために、大金を用意し、わざわざ使節を送った。断られると、李広利將軍に遠征までさせた。古代における、駿馬の重要さが十分に伝わってくる。そして、武帝は馬と同時に人材をも求めて、かつてこのような詔を下した。『漢書』「武帝本紀第六」より引用する。

詔曰、蓋有非常之功、必待非常之人。故馬或奔蹏而致千里、士或有負俗之累而立功名。（詔して曰く、「蓋し非常の功有るは、必ず非常の人を待つ。故に馬或ひは奔り蹏ふたんで千里を致し、士或ひは俗を負ふの累有りて功名を立つ」と。）

非凡な人材を非凡な馬に喩えている。武帝は馬も人材も積極的に求め続け、強大なる国家へと成長させた。

良馬を見抜くことに着目すると、湖南省長沙市の馬王堆漢墓から出土した『相馬経』はまさに良馬を見抜く手引き書であった。馬の頭や姿形などからどのようにその備わっている性質を見抜くことができるかが系統的に書かれている。馬が重要視される時代において、馬の優

劣を識別する知識や眼力も要求されただろう。『史記』卷百二十六「滑稽列伝第六十六」に「相馬失之瘦、相士失之貧。(馬を相るに之れを瘦に失し、士を相るに之れを貧に失す)」というように、良馬を見抜くには、外面に騙されない眼力が必要である。太子が数百匹の馬から、甲斐の国より献じられた黒駒のみを「神馬」と断言したことは、太子が良馬を見抜く能力の持ち主であることを端的に示すものであろう。

ところで、聖徳太子も武帝と同じような中央集権を強化した、有為な統治者であった。駿馬を全国に求めるといふ行動も太子の積極的な為政者の像を描き出そうとしていると考えられる。駿馬を求めめるだけではなく、太子が地方から奉げられる数百匹の馬から、すぐ快足の黒駒を見抜いて、そして黒駒の御者として相応しい調子磨を任命した。まさに千里の馬と賢い人材を見抜いた名伯楽としての一面を伝えている。

おわりに

聖徳太子が古代日本人の理想的な人物像として、その死後、様々な伝記が記されて、様々な説話的要素や奇異譚が太子の身に付け加えられた。本稿で考察してきた黒駒説話は『今昔物語』、『三宝絵』、『本朝神仙伝』などの数多くの作品にその話題が採られるなど、太子信仰の普及とともに広く知られたであろう。

その初出する書である『補闕記』とより完全な黒駒説話を目指した『伝暦』とは、あらゆる太子伝記の源泉であり、とりわけ『伝暦』は

太子伝記の集大成としての意味を持つ。この二つの伝記の記載によれば、この説話が中国の故事から影響を受けて形成されたことがわかる。この黒駒の意味を考えるにあたっては、古代中国における馬のイメージを合わせてみるのが肝要となろう。

これらの太子伝記をみると、太子を常人の及ばない超越した能力の持ち主として理解し、神格化しようとする意図が読み取れる。しかも、中国古典における天子と駿馬の故事を重ね合わせて考察すると、当時の人々が太子を神だけではなく、治世の聖人として敬慕して、理想的な君主像を描いていたのではないかと思われる。この神と聖人の二つのイメージを具現化しているものこそ聖徳太子の黒駒説話であると考える。

注1) 聖徳太子がなぜ厩戸と称される理由について、主に以下のような説がある。

①『日本書紀』推古天皇元年の条に、太子の出生について、「母の皇后を穴穂部間人皇女と曰す。皇后、懐妊開胎さむとする日に、禁中に巡行して、諸司を監察たまふ。馬官に至りたまひて、乃ち厩の戸に当りて、勞みたまはずして忽に産れませり」という記事がみえる。この『日本書紀』によるとする説(テキストは坂本太郎等校注『日本書紀』による)。

②キリストの降誕説話の影響を受けて、渡唐の僧徒が作り出したと主張する説(久米邦武氏「上宮太子実録」)。

③聖徳太子生年は甲午年であることに由来するとする説(長沼賢海氏「聖徳太子論考」の第一章「太子の称号の数々」)。

② 『補闕記』の書名が『伝暦』の跋本に見える。『伝暦』は延喜一七年(九一七)に成立したところから考えると、『補闕記』の成立は遅くても延喜一七年以前であると思われる。望月信成氏の「聖徳太子御伝叢

書』の書目解説の部分によると、「日本紀を日本書紀と云ふ所から、日本書紀の書の字を用ひた時代、即ち弘仁私記序文より時代の降るものと見る。又延喜十七年の編纂にかかる聖徳太子伝暦の跋本に既に本書の名が出ている所から、それ以前の撰著であることが明らかである。」と書かれている。

- (3) 『大谷女子大学紀要』一二(二)、一九七八年三月。後に『民衆宗教史叢書』三二巻『太子信仰』（雄山閣、一九九九年一〇月）に収録される。
- (4) 『補闕記』の伝本は少なく、飯田瑞穂氏の『上宮聖徳太子伝補闕記』について―特に本文校訂に関連して―、附、彰考館蔵「上宮聖徳太子伝補闕記」翻印』（『中央大学文学部紀要』史学科二二、一九七七年三月）によれば、主に彰考館蔵本・群書類従所収本などがあり、類従本の底本が彰考館本であることはほとんど疑いないという。そのため、本稿において、氏の前掲の論文に掲載する彰考館蔵の『補闕記』の翻印本によって引用する。
- (5) 長田夏樹氏によると、「富士を恐らくは『管子』『霸言篇』にある「聖人能補時不能違時」に基づくと思われる補時岳という表記がとられている」という。『補闕記』に出てくる「補時岳」は富士山のことを指す。『聖徳太子伝暦』影印と研究』（桜楓社、一九八五年二月、日中文化交流史研究会編）の序文による。
- (6) 長田氏によると、「三越つまり越前・越中・越後に分かれてからの名称が高志之州となっている」ということから、ここの「高志之州」が『伝暦』中の三越にあたる。（『聖徳太子伝暦』影印と研究』（桜楓社、一九八五年二月、日中文化交流史研究会編）の序文による。）
- (7) テキストは飯田氏の前掲の論文に掲載する彰考館蔵の『補闕記』翻印によって引用する。訓読は筆者による。
- (8) 『聖徳太子御伝叢書』（金尾文淵堂、一九四二年）の書目解説による。
- (9) 藤原猶雪は延喜一七年（九一七）に藤原兼輔が撰したと提唱する（復元『聖徳太子伝暦』（聖徳太子奉賛会、一九二七年一〇月）による）。
- (10) 近時これを疑う説もあるが、本稿では深く考察しないことにする。テキストは東大寺図書館蔵文明十六年書写本による。訓読は『聖徳太子伝暦』影印と研究』（桜楓社、一九八五年二月、日中文化交流史研究会編）を参照したが、適宜私意によって改めたところがある。
- (11) 『大谷女子大学紀要』一二(二)、一九七八年三月。後に『民衆宗教史叢書』三二巻『太子信仰』（雄山閣、一九九九年）に収録される。
- (12) 清の嘉慶帝の命によって編纂される。唐・五代の散文の総集。唐の政治・経済・文化・思想などの研究に欠かせない資料である。
- (13) 一九一六年に丁福保が編纂した『全漢詩』に「天馬歌」と「西極天馬歌」という題で二首の詩歌を収録する。「天馬歌」と「西極天馬歌」という題名は、丁氏が『全漢詩』に収める際に付けたものである。後世はその言い方を踏襲した。
- (14) 『漢書』「武帝紀第六」によると、武帝は元鼎四年に一匹の渥洼川から出た馬を得たという。
- (15) 今の甘肅省酒泉の西方に当たる。
- (16) テキストは「和刻本正史」『漢書』（汲古書院、一九七二年）による。訓読はちくま学芸文庫『漢書』（小竹武夫訳）を参照し、私意によって改めたところがある。
- (17) テキストは「和刻本正史」『漢書』（汲古書院、一九七二年）による。訓読はちくま学芸文庫『漢書』（小竹武夫訳）を参照し、私意によって改めたところがある。
- (18) この観点を抱く研究者とその論文を挙げてみると、
 - ① 下積与氏が「神仙思想―日本武尊と聖徳太子説話を中心として―」で、「太子の黒駒説話が全くシナの神仙類似のもので、この場合の神馬はあたかも彼の地における鶴や龍にも似た役割を演じている」と述べた。
 - ② 中村宗彦氏が「聖徳太子の駒」で、黒駒伝説が「神仙譚の流行と相まって大陸の周穆王の天上遊行説話を結びつけるのは極めて容易であつたであろう。」と指摘した。